

線画を題材とした幼児の身体表現

高野 牧子 小田 ひとみ*

*湘北短期大学

The Creative Movement of Young Children Using the Abstract Drawing

Makiko TAKANO Hitomi ODA*

Yamanashi Women's Junior College

*Shouhoku Junior College

The purpose of this paper is to consider the possibility of the creative movement which uses the abstract drawing as a theme. Six drawings were shown to children aged 5-6, and we examined their verbal and physical expressions evoked by the drawings. The following results were obtained:

- 1) Children built up various images from the abstract drawings, and expressed them by the word and the movement.
- 2) Their creative movement can be divided into two types. One is the dynamic movement, often made individually. Another is the static pose that children made as a group.
- 3) The abstract drawing stimulated young children to create movements expressing time, space, and dynamics.

1. 研究目的

身体表現は感じたことや考えたことを体の動きを媒体にして外在化していく活動である。

幼児期は言語による表現が未発達なため、身体表現は重要なコミュニケーションの手段であり、生活の全てが表現題材になると考えられる。一方、実際の表現の指導では、造形、音楽、身体表現に分かれている場合が多く、総合的な表現の指導法を検討する必要があると考えられる。

筆者らはこれまで、幼児が主体的に楽しく行える身体表現の指導と援助の方法について実践的に研究を進めてきた。従来から行われている「模倣表現」つまり、「～になろう」という変身あそびや、昔話や物語を演じながら動きで表現していく「ストーリー・プレイ」は、まず表現しようとする対象をイメージし、その特徴を動きで表現していく方法である。一方、筆者らが提案する「動きあそび」はいろいろな動きを体験しながら、動きがもつイメージを感じていく方法である。これまでの研究を通して、指導者主導でいろいろな動きに挑戦する中で、次第に子どもたち自身が主体的に新しい動きを創造し、また動きながらイメージを想起できることを報告してきた。¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾

本研究では総合的な表現活動として、造形表現と身体表現を関連させ、抽象的な線画をみて、子ども達がイメージし、動きで表現することの可能性を検討していきたい。図形と身体表現についての研究は西らが3歳から5歳児を対象に「まる」や「さんかく」について言葉や絵、具体物を示し、身体表現を行なった研究があり、5歳児では「まる」を提示すると、「転がる」など表現対象のもつ性質を動きで表現できる事を報告している。⁶⁾

本研究では「まる」や「さんかく」という図形ではなく、より抽象的な線画を示し、その線画の性質を捉え、表現することが可能かどうか、検討する。また、こうした線画題材によって、動きの表現要因である時間性・空間性・力性の多様な要素を引き出せるのかどうか、検討をすすめることとする。

2. 研究方法

(1)概要

研究場所 東京都内私立F幼稚園

指導観察日 2001年1月11日

研究対象 5歳児(年長組)全5クラス

①組 34名(男児20名・女児14名)

- ②組 34名(男児20名・女児14名)
- ③組 34名(男児21名・女児13名)
- ④組 33名(男児19名・女児14名)
- ⑤組 31名(男児18名・女児13名)
- 合計 166名(男児98名・女児68名)

題材とした線画は、38cm×51.5cmの白無地に黒マジックで描いた。また☆のマークが星を示すように具象的な線画は避け、多様なイメージが想起しやすい抽象的な線画とし、異なる6つの線画を提示した。前半2つの線画は直線的なもの、後半の4つは曲線的なものとした。また、提示の順番は各クラス同一にした。

(2)指導の展開方法

この園では年長児を対象に2000年5月より2001年2月まで計7回、筆者らによる指導観察を実施し、本研究は第6回の活動であった。従って、対象児は指導者である筆者らにも慣れ、身体表現活動の展開もおおよそ理解しており、日常に近い対象児の様子を観察調査できたと思われる。指導は①⑤組を高野、②③④組を小田が指導した。

指導の展開は、線画を子どもたちへ提示する段階で2つの方法をとった。以下に、指導の展開を示す。

1)全クラス共通に準備体操を兼ねて軽快な曲に合わせて踊り、心身を解放する。

2)線画の題材へ展開

線画を提示し、「これなあんだ?」「何に見えるかな?」など、指導者が問いかけ、自由に表現する。

方法a) 線画を見せる時に立位で行ない、言葉でも身体表現でもどちらでも自由に表現する。 ⇒ ①④組で実施

方法b) 全ての線画を座位で見せながら、言葉でイメージを表現してから、身体表現に進め、言葉から身体表現へと段階をおう。
⇒ ②③⑤組で実施

3)「当てっこゲーム」へと発展

子どもたちを2グループに分け、グループで相談して線画を選び、表現する。もう一つのグループがその表現を見て、表現した線画を当てる。

(3)記録の方法と分析視点

全クラスの活動をデジタルカメラ1台によって、子どもたちの前方右手からVTR撮影すると同時に、線画を見た幼児の発語を速記した。

分析視点は以下の2点である。

- 1)指導の展開方法による表現内容の比較
- 2)線画からイメージした子どもの発語と動きの分析

3. 結果および考察

(1)指導の展開方法による表現内容の比較(表1)

方法a)で、始めから言葉と動きの両方で表現した①組の場合、特に発語が少なかった。これは、最初から動きでも表現するよう指示したことが強く影響したと考えられる。また動きでの表現も、すぐに表現できる子どもと悩んでしまって動き出せない子どもがあり、指導者が少し身体表現を例示したり、子ども達の中に入って擬態語などで、言葉かけをすることによって、動きが引き出される傾向が認められた。しかし、同じ方法で展開した④組はあまり考え込まず、比較的スムーズに身体でも表現する事ができ、動きの多様性が認められた。

一方、方法b)の言葉でのイメージ想起から身体表現へ段階をおって進んだ②③⑤組は、方法a)と比べ、言葉でのイメージ想起を十分に行なったので、全体に発語は多かった。しかし、動きについて②⑤組は、多様な動きで表現できていたが、③組は多様性には欠けていた。

表1 指導の展開方法および指導者による表現内容の比較

組	①	②	③	④	⑤
方法	a 立位	b 座位	b 座位	a 立位	b 座位
指導者	高野	小田	小田	小田	高野
平均発語数	1.2	4.5	5.0	3.5	6.3
動きの多様性	少	多	少	多	多

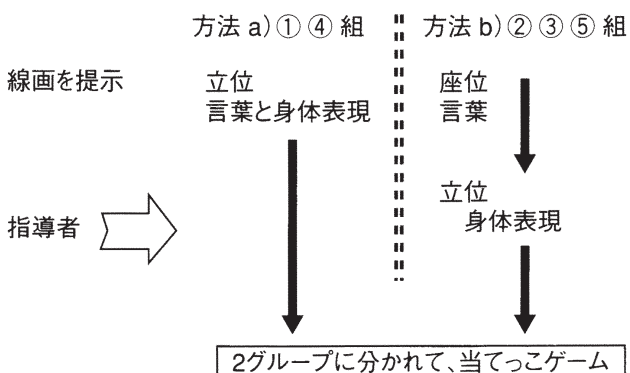


図1 指導の展開方法

従って、方法 a)b) どちらの方法でも、多様な動きが引き出される場合と多様性に欠ける場合があり、今回の研究では指導の展開方法による差は認められなかった。

また指導者について、高野が担当した①⑤組でも、小田が担当した②③④組でも、発語、動きの多様性とも多い組と少ない組が出現し、特に指導者による違いはなかった。両者とも保育養成機関に所属し、身体表現の指導経験において差がないので、指導者の差による影響を受けなかったと考えられる。

後半のゲームの活動では、どの組も集中して活動に取り組み、指導者の違いやそれまでの活動の展開による差は認められなかった。特に題材選びの相談はどの組でも全員が楽しそうに参加し、意見の対立はあるものの、順番にしたり、譲り合って題材を決定し、友達と協力して表現することが多く、協調性が養われていた。またゲーム化したことで見る態度も整い、友達の動きを一生懸命に見ることができていた。どの組も活動に意欲的に楽しく取り組むことができ、動きもグループでの表現がほとんどであり、差異は認められなかった。

(2) 線画からイメージした子どもの発語と動きの分析

線画からイメージした子どもの発語と動きについて、各線画ごとに検討していく。各線画に対する子ども発語は、組ごとに出現順で連記した。動きは全ての組のVTRから得られた主な動きを記載し、各線画ごとに表にまとめた。

1) 線画1による子どもの発語と動きの分析(表2)

子どもの発語では全ての組に共通するものはないが、雷や山、ギザギザと鋭い感じをとらえたイメージ、馬、きりんなど首を伸ばしたイメージ、そして英語教育を行っている園なので、ZやWなどアルファベットをイメージした発語があった。

動きでは直線的でかちっと曲がった感じをとらえ、形をポーズで真似る動きが多かった。写真1に示した子は立位で肘を曲げ、両膝も屈曲して絡めた表現事例であり、この他、片足立ちで、遊脚は膝を曲げ、強く足屈し、両手指先も伸ばし、鋭角を意識した表現や大の字に立ち、手首を曲げるなどがあった。また床に手をついて、腕を伸ばし、斜めの線を強調したり、2人組で表現した事例や床にみんなでこの形になるように寝て表現した事例もあった。いずれの事例もその場でポーズする静的なものが特徴的であった。以上より、線画1は直線的で鋭く、そして持続的な動きの要素を引き出せる題材と考えられる。



写真1

表2 線画1に対する子どもの発語と主な動き

線画1	子どもの発語 (○数字は組を示す)	主な動き
	① サンダー かみなり	片足立ちで手を斜め上と斜め下に伸ばす
	② 山 牙 英語 はた 馬 Z	両肘を曲げて、ポーズ
	③ W かみなり ヘビ 鳥 つばさ つる 馬 ギザギザ	床に伏せ縦列し、線画のような形をみんなで作る
	④ かみなり 山 針	片手でZを描く
	⑤ きりん 英語 Z かみなり ヘビ	床に寝て両手両足を上に上げ、がちっと屈曲させる
		立位で肘を曲げ、両膝を曲げ、絡める 片足立ちで遊脚は膝を曲げ、両手指先を伸ばす 大の字に立ち、手首を曲げる 床に片手をつき、腕を斜めに伸ばす

2) 線画2による子どもの発語と動きの分析(表3)

線画2の発語は矢印が最も多く、花火や爆発といったエネルギーの発散と捉えたイメージや針・サボテン・ユニットゲなど鋭さのイメージなどがあつた。

動きでは静的なポーズの事例として、写真2のように、一人で両手を合わせ、床に細長く寝て矢印の鋭さを表す子が最も多くいた事例であつた。また、立位では同じく写真2に示したような2人組であちこちに針が出ている様子を表そうとした事例が見られた。

写真3の事例は、爆発のようなエネルギーの発散を表したと考えられる事例で、四肢を四方に伸ばし、思いっきりジャンプしていた。この他、細かく足踏みしながら、あちこちへと突き刺す動作を速く繰り返す事例もあつた。



写真2



写真3

従つて、線画2は鋭さを保つた静的なポーズとダイナミックに素早く空間を切り裂いていくような動きの両方が引き出される結果となつた。

3) 線画3による子どもの発語と動きの分析(表4)

線画3は渦巻き、かたつむりという子が多く、また全体に発語が多かつたのも特徴である。動きは腕をまわす、一人で自転するなど、ダイナミックに回転する動きが多い中、床に寝て渦巻き模様を

表3 線画2に対する子どもの発語と主な動き

線画2	子どもの発語 (○数字は組を示す)	主な動き
	① 時計 針	両手を頭上で尖らせ、細長く寝る
	② 花火 矢印 お花 太陽	両手をあちこちへ向かって突き刺しながら、足も交互に弾む
	③ 花火 矢印	両手両足を広げ、ジャンプ
	④ 時計 星 矢印	両手を斜めに伸ばし、大の字で立つ
	⑤ サボテン ユニットゲ ハリネズミ 花 矢印 爆発	2人組で重なり、両手を斜めに伸ばす 両手を突き刺しながら、細かく足踏み

表4 線画3に対する子どもの発語と主な動き

線画3	子どもの発語 (○数字は組を示す)	主な動き
	① うずまき	指を回す
	② うずまき かたつむり 竜巻 あめ 台風 ブラックホール 遊戯王 ホワイトホール	片腕をグルグル回す 1人で自転 ケンケンで回る
	③ かたつむり うずまき そば かたまり キャンディー ブラックホール	床を転がる 座位で臀部を支点にして回る
	④ たつまき かたつむり ぐるぐる うずまき メリーゴーランド 迷路	伏せて、へそを支点にして回る 2人で手をつないで回る
	⑤ かたつむり ヘビ 矢的 あめ 貝殻 耳 めがね	数名で寝て縦につながり、渦巻き模様を床に描く

数名で創った静的なポーズもあった(写真4)。またへそを支点に回り始めていた子どもに対し、④組では担任が援助して、より速く回してあげていた。こうした積極的な援助によって、楽しい雰囲気全員に広がり、臀部を支点にして回る、2人で手をつないで回るといった多様な動きが引き出されていった。

この様に線画3は回転動作を促す特性があると考えられる。

4) 線画4による子どもの発語と動きの分析(表5)

線画4では圧倒的にシャボン玉という発語が多く、風船・泡など浮遊感のある軽い感じのイメージと、ボール、だんご、ビー玉、フラフープなど、丸の形から想起したものがあつた。またユニークな発想ではチーズの穴などもあつた。動きとしては、3人で手をつないだり、足を合わせたりして、円を作る子ども(写真5)が多く、自然にグループでの表現活動になっていった。特に立位で手をつないだ場合のほとんどがグルグルと回り始めた。その一方、一人で脚や腕、手などで円を創る子の事例や、頭の上に手で円を創りながら、ふわっと何度も跳び、軽さを巧みに表現した事例も得られた。

先行研究では、「まる」の図形から転がるイメージが引き出され、前転の動きを得たが、本研究ではたくさんの大小の「まる」から、転がるイメージより、浮遊感や軽さをイメージし、回る、跳ぶの動きを引き出したと考えられる。



写真4



写真5

表5 線画4に対する子どもの発語と主な動き

線画4	子どもの発語 (○数字は組を示す)	主な動き
	① シャボン玉	両手・両腕で丸を作る
	② シャボン玉 風船 泡	脚をがに股にし、丸を作る
	③ シャボン玉 お月見 宇宙の星 石 ボール バブル だんご ビー玉	両側に束ねた長い髪を持って円を作る 立位で前屈し、つま先をもつ
	④ 風船 シャボン玉 コーヒーカップ	数人で内向き円を作り、回る
	⑤ シャボン玉 水たまり チーズの穴 卵 泡 フラフープ	全員で手をつなぎ、大きな円になる 3人で手をつないで丸く寝る 3人でつま先を合わせて脚で円を作る 腕で丸を作りながら、ジャンプ

5) 線画5による子どもの発語と動きの分析(表6)

線画5は①組以外は発語もいろいろなイメージを生んだ。特に雪・雨・雲・氷・水滴など水に関するものが多く、中でもバッシャンなど、特徴をとらえた擬態語もあった。他に花火や爆発など拡散的なもの、冠や流れ星のように輝くもの、また亀は亀甲模様をイメージしたと考えられるものなど多岐に及んだ。

動きは最も難しいと想定していたが、様々な動きの工夫が見られた。写真6の事例は単に円になるのではなく、つないだ手を外向きに捻り、クロスさせて、外向きの部分を細やかに表現し、前の線画4との違いを表現していた。また、3人で手をつなぎ、円になり、一斉にジャンプし、外側に足を跳ね出すようにし、飛び散るような勢いのある感じを十分に工夫した表現事例もあった。また写真7の事例は、放射状に寝て、中心に一人立ち自転した。またこの中心は交代して行っていった。自分達で相談しながら、役割を決定し、1つの表現にまとめていく力は年長児ならではの構成力と考えられる。

線画5のような複雑な形でも、友達と協力して表わす活動へ展開が可能であると思われる。

6) 線画6による子どもの発語と動きの分析(表7)

線画6はへびという発語が全ての組で共通に出現した。その他、ぐにゃぐにゃといった柔らかく少し重さのある質感のイメージでは他にソフトクリームや水あめなどが同質のイメージと考えられる。



写真6



写真7

表6 線画5に対する子どもの発語と主な動き

線画5	子どもの発語 (○数字は組を示す)	主な動き
	① 雪	仰向けで、両腕両脚を屈曲させて広げる 4~5人で円になり、つないだ手を捻り、クロスさせ、外側へ出す 手をパッとあちこちに広げる 7~8人で放射状に寝て一人が真中で自転 腹ばいになり、手足を四方に伸縮する 円になり、ジャンプで足を外へ跳ね出す
	② 雨 雲 メタモン ジェットコースター	
	③ 雨 氷 雪	
	④ くもの巣 花火 爆発 水滴	
	⑤ 星 花火 お花 爆発 かさ 冠 亀 流れ星 雨 バッシャン	

表7 線画6に対する子どもの発語と主な動き

線画6	子どもの発語 (○数字は組を示す)	主な動き
	① ヘビ ぐにゃぐにゃ	床をくねくね這う しゃがんだり、立ったりしながら、合わせた両手をくねらす 床に寝て両手両足を上げ、くねらす 7~8人で床に寝て、連なって蛇行模様を描く 全員で寝て、蛇行模様を描く
	② ヘビ ドラゴン チ メロン	
	③ ヘビ ウンチ ソフトクリーム	
	④ ヘビ 迷路	
	⑤ ヘビ 竹の子 水あめ しまうま模様 ぐにゃぐにゃ道路	

動きとしてはやはり、床に寝てくねくねという動きが最も多かったが、ユニークな事例として床に寝て両手両足を上げ、ゆっくりとくねらせながら、伸ばしたり縮めたりする事例があった。また床に連なって縦列し、7.8人が蛇行模様を描いたのをきっかけに、全員がくねくねと連なっていった事例(写真8)も観察できた。このように、長い線画では自然に友達と協力しながら、表現していく姿が多く観察できた。

従って線画6のような長い線の題材では、友達と協力して表現することを促進できると考えられる。

4. まとめ

抽象的な線画を題材にした身体表現あそびの可能性を検討した。その結果を次にまとめる。

- 1) 線画を提示し表現する方法として、最初から言葉や身体で同時に表現する方法と、言葉で表現してから身体表現へ導く方法の2つを行なったが、どちらの方法でも多様な動きを生む場合と多様性に欠ける場合があり、指導の展開方法による影響は認められなかった。
- 2) 各線画とも12~20種類の言葉を想起し、各クラス共通に出現した言葉と、豊かな発想に基づいた独自のイメージ想起があった。
- 3) 子どもたちは各線画の特徴から、直線的と曲線的という空間性、速くとゆっくりという時間性、鋭くと柔らかくという力性などについて、対極の動きの要素を巧みに捉え、表現することができた。
- 4) ダイナミックな動きで表す表現事例と線の形を模倣してポーズをとる表現事例が出現した。動きで表す事例は1人で表現する場合に多く、友達と協力する場合はポーズの傾向が強かった。また円などの閉じた線画や長い線による線画



写真8

- は、友達と手をつなぎ、表現する事例が多く、協力して表現することが促せる題材であった。
- 5) 当てっこゲームへと展開したことにより、後半でも活動に集中し、子ども同士で相談し、工夫する協調性が養われた。

以上より、子どもたちは抽象的な線画からイメージを広げ、言葉や動きで豊かに表現することができ、総合的な表現を促す題材であると考えられる。今後も、このような即興的な表現を楽しむ活動によって、造形表現と音楽表現、身体表現が相互に関連しながら、総合的な表現活動へと発展していくことが重要であると考えられる。

また、一人一人の感じたままを身体で表すことができるようになる為には、動きによる身体表現の方法をより系統的に体験することが必要である。そこで動きのもつ表現性とその構成要因である時間性・空間性・力性において対極的な要素を、系統的に楽しく体験できる題材として、どのような線画が適当か、今後も検討していきたい。

参考文献

1. 高野牧子・小田ひとみ(1999) 幼児への創造的身体表現の指導法Ⅰ, 山梨県立女子短期大学紀要, 第32号, pp.131-141.
2. 小田ひとみ・高野牧子(1999) 幼児への創造的身体表現の指導法Ⅱ, 湘北短期大学紀要, 第20号, pp.95-101.
3. 高野牧子・小田ひとみ(2000) 幼児への創造的身体表現の指導と援助に関する研究, 水野スポーツ振興会研究報告書.
4. 高野牧子(2001) 動きあそびからイメージをー「川をジャンプ」を題材にしてー, 女子体育第43巻第6号, pp.24-27.
5. 小田ひとみ・高野牧子(2001) 幼児の身体表現事例(2)ーバランスあそびから自己表現へー, 湘北紀要, 第21号, pp.27-34.
6. 西洋子・川村真寿美(1988) 幼児の身体表現活動の発達ー図形のイメージと表現ー, 舞踊学第11号別冊, pp.26-28.

